

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01335

研究課題名（和文）ボナパルティズムの再検討：民主的専制の形成過程とその対抗言説の思想的・実証的分析

研究課題名（英文）Bonapartism Revisited: An Ideological and Empirical Analysis of Democratic Despotism and Its Counter-discourse

研究代表者

高山 裕二（TAKAYAMA, YUJI）

明治大学・政治経済学部・専任准教授

研究者番号：90453969

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀フランスに生まれる「ボナパルティズム」を検討することで、民主主義国家の政治（執行）権力が専制化する過程とその構造、およびそれに対抗する勢力の論理を思想的かつ実証的に解明した。具体的には、まずルイ＝ナポレオンの思想と行動（ボナパルティズム）を検討し、民主的専制の形成過程とその構造を明らかにした。続いて、専制に対抗する選挙戦略の一環として形成された「リベラル連合」のなかでも共和派の思想に着目し、恣意的権力に対抗する言説を分析した。最後に、20世紀になってボナパルティズムの変種として登場したゴールイズム（ドゴール主義）の特質を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で政治概念として新たに創出された「ボナパルティズム」は、現代の民主的国家一般における恣意的権力の形成過程とその特徴を分析するのに役立つと考えられる。これまで政治学の分野では、それはたいてい民主的独裁と片付けられ、あくまでフランスに特殊な「権威主義的」体制として過小評価されてきた。しかし、本研究でそれを従来の「独裁」とは異なる「専制」として特徴づけ、より一般的な分析概念として提示した。そのことは、民主主義の危機がしばしば「ポピュリズム」と一括され、その内実が十分に検討されることのない今日では、学問的であると同時に社会的に意義が大きいと言える。

研究成果の概要（英文）：By examining "Bonapartism" that had emerged in nineteenth-century France, this study elucidated the formation process and structure of democratic despotism and the logic of the forces opposing it from an ideological-historical and empirical perspective. To this end, first, it examined the ideas and actions of Louis Napoleon (Napoleon III). Second, it focused on the discourses of "L'Union liberale" formed as part of the electoral strategy against democratic despotism under the Second Empire, and showed the logic against arbitrary power. Finally, third, it clarified the characteristics of "Gauillisme," which emerged in the 20th century as a variant of Bonapartism.

研究分野：政治学

キーワード：ボナパルティズム 民主的専制 ルイ＝ナポレオン 第2帝政 リベラル連合 ポピュリズム

### 1. 研究開始当初の背景

今世界中で「ポピュリスト」と呼ばれる政治家とその支持者が影響力を増している。この世界政治を覆う現象を政治学はどう認識し分析できるだろうか。ポピュリズムはしばしば「大衆迎合主義」と訳され蔑称の印象が強いが、それはエスタブリッシュメントに対して一般民衆（庶民）の声を代弁しようとする主義主張である。その意味では「民主的」な主張・運動であって、それ自体に問題があるわけではない。それが現代の政治（学）において問題となるのは、社会を二項対立（友敵）的に分断するとともに、権力を抑制・均衡させる仕組みを打破しようとする点である。これは政治学では民主主義の「権威主義化」と呼ばれる。

これだけ見ても、ポピュリズム自体を良い悪いと断定することは難しい。それはもともと 19 世紀末に始まった民衆の声を代弁する運動であるため、今日の「権威主義化」の議論にそれを用いることで混乱が生じている。結局、政治学では現代の最重要な政治現象について適切に分析する概念が欠落しているのではないか（ポピュリズム時代の政治学の理論・概念の貧困）。本研究は、政治思想史の立場から、この欠落を補うことを課題とするものである。

従来、政治学では抑圧的な民主的体制を分析するのにファシズムや独裁・暴政といった概念が用いられてきた。今日も、日本国内では政府を批判する際に「独裁」という言葉が用いられるが、例えばトランプ大統領（当時）のアメリカ合衆国も独裁（制）と規定することはできない。また、暴政・僭主政（tyranny）もしばしば用いられるが（最近の用例として Timothy Snyder, *On Tyranny: Twenty Lessons from the Twentieth Century*, Tim Duggan Books, 2017 がある）、これは古代ギリシア以来恣意的権力一般について使われてきた用語で、汎用性があまりに高すぎ、批判のための概念にはなっても分析概念としては欠陥がある。さらに、日本語で書かれたもっとも標準的な政治学の教科書（久米郁男ほか『政治学 補訂版（New Liberal Arts Selection）』有斐閣, 2011 年）によれば、ファシズムは共産主義とともに全体主義の一種とされるが、現代のポピュリズム国家を「全体主義」と呼ぶことは不可能だろう。基本的には言論の自由が保障され、競合的多党制が存在し普通選挙制が実施されているからである。

これに対して、本研究では同じく古代以来の政治概念である「専制」に注目する。それは暴政とは違って、民衆の「同意」を基調としながら「法の支配」を打破するところに基本的な特徴がある。これはモンテスキューによって西洋の政治体制を分析する概念として用いられ始めたが、近代革命をへて専制はいわば民主化される。具体的には、制度として普通選挙制を実施し、政策として経済成長を目標とする体制として出現する。その最初の実例が、フランス第 2 帝政の制度及び理念を指す「ボナパルティズム」である。19 世紀後半に米露で生まれたポピュリズムがフランスでは世紀が代わっても政治概念としては用いられなかったのは、ボナパルティズムが代用されたからだとされることにも留意すべきである（Guy Hermet, *Les populismes dans le monde. Une histoire sociologique*, Fayard, 2001）。

しかし、政治学の分野でも、デュヴェルジェらの影響のもと、ボナパルティズムは民主主義における一種の制度・理念として分析されることはあったが、しばしば民主的独裁と片付けられ、あくまでフランスに特殊な「権威主義的」体制として過小評価されてきた。

### 2. 研究の目的

本研究では、19 世紀フランスに生まれる「ボナパルティズム」を民主主義国家一般に生じる現象として分析することで、デモクラシーにおいて政治（執行）権力が専制化する過程とその構造、およびそれに対抗する勢力の論理を、思想史的かつ実証的に解明することを目的とする。

「ボナパルティズム」は、ナポレオン・ボナパルト（ナポレオン 1 世）に由来するが、それが政治イデオロギーとなったのは彼の死後で、体系化したのはルイ＝ナポレオン（後のナポレオン 3 世）と言われる。それは第 2 帝政において、経済成長を達成しながら多数者の支持を得て行政府（執行権者）に権力が集中する制度及び理念として開花した。しかし第 2 帝政では、かなりの程度言論の自由や野党の存在が認められていたことにも注意する必要がある。

そこで、本研究では、（1）ルイ＝ナポレオンの思想と行動（ボナパルティズム）を検討し、民主的専制の形成過程とその構造を明らかにする。そのうえで、（2）選挙戦略として帝政に唯一対抗しうる勢力を形成した「リベラル連合」（1863 年）の共和派指導者の思想を検討し、民主主義を否定することなくその専制化を避けるための対抗言説の可能性と限界を明らかにする。

さらに、（3）帝政後に経済（金融）危機を背景に人種主義と結びつきながら復活する、ボナパルティズムの変種について検討する。こうしてボナパルティズムを第 2 帝政後も射程に入れて検討することで、民主的専制が人種主義や反経済的自由主義と結びつく理由を明らかにし、民主的専制の諸パターンを歴史的・実証的に導出することを目指す。

### 3. 研究の方法

本研究では、コンテクスト（政治・経済史）の理解を進めながら、さまざまなテキストの読解

を遂行することが主たるアプローチになるが、テキストがいわゆる政治思想家のそれに限定されないところに独自の特徴がある。それは次の3種類に大別される。

(1) ルイ＝ナポレオンの著作、『ナポレオンの諸観念』(1839年)や『貧困問題の絶滅』(1844年)、『著作集』(1852-54年)の諸論考とともに、彼のブレインであるミシェル・シュヴァリエの政治経済思想の諸著作を検討する。(2) ルイ＝ナポレオンの著作以外の関連文書(行政文書・書簡等)の収集・調査を重点的に遂行する。帝政の政策が実際にどれほど皇帝の「思想」に基づいてなされたのかを解明するには、政策過程における彼の発言や私信の検討は欠かせない。そのため、フランス・パリにある国立中央古文書館(Archives Nationales)に保管されている同関連文書(Fonds Napoléon des Archives nationales 400 AP)、及びナポレオン3世自身の関連文章(400 AP 25-150)を考察する。

(3) 新聞や雑誌の記事、あるいは「文学」に属するような文献を広く渉猟し、学際的な思想史のアプローチを採用する。そもそも、ボナパルティズムの成立過程で登場した大衆メディアの役割を無視することはできず、民主的専制化を政治・社会史的に明らかにするうえで、*Journal des Débats*, *Revue des Deux Mondes*, *Siècle*等の新聞・雑誌の分析は欠かせない。また、それに対抗する言説も、大衆メディアを媒体として展開された。今日「文学」に属するゾラのような作家は新聞小説というかたちで帝政あるいは人種主義を分析・批判する記事を連載した。このように本研究では、今日のジャンルにとらわれず広範な分野のテキストを活用する。

#### 4. 研究成果

本研究では、19世紀フランスに生まれる「ボナパルティズム」を広く検討することで、民主主義国家の政治(執行)権力が専制化する過程とその構造を、思想史的かつ実証的に解明した。ボナパルティズムとは、一般的にフランス第2帝政の制度と理念を指すが、強力な執行権力に基づいた民主主義モデルとして帝政後も影響力を持つことになる。本研究では、(1)第2帝政の政治経済史の先行研究を整理するとともに、ルイ＝ナポレオンの思想と行動(ボナパルティズム)を検討し、所定の研究期間内に部分的に公表することができた。

また、(2)専制に対抗する選挙戦略の一環として形成された「リベラル連合」について、新聞・雑誌の論説の分析を進めたが、その成果を公表するには至っていない。また、19世紀末の経済(金融)危機の前後で再登場するボナパルティズムとその変種(ブーランジスム)の反経済自由主義的かつ人種主義的な専制の特徴についても、なお十分な成果を得られていない。

他方で、(3)(1)の研究をする中で、戦後日仏のボナパルティズム論の相違に着目することになり、その原因がフランスにおけるドゴール将軍の登場とその評価にあることが明らかになった。そのため、現代のボナパルティズムとしてドゴール主義(ゴーリズム)を検討し、その成果を戦後日本の「フランス知(フランス思想)」の共同研究の一編として発表することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高山裕二	4. 巻 26
2. 論文標題 ボナパルティズム再考 フランス第二帝政の統治制度と理念に関する素描	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuji TAKAYAMA	4. 巻 -
2. 論文標題 Beyond 'civil religion': On Pascalian Influence in Tocqueville	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 History of European Ideas	6. 最初と最後の頁 518-535
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/01916599.2021.1975153	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高山裕二	4. 巻 61 (2)
2. 論文標題 フランス第2帝政と「ボナパルティズム」の研究史素描	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治大学社会科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 103-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yuji TAKAYAMA
2. 発表標題 The Rise of National Populism: A Study of Envy in Tocqueville's Political Thought
3. 学会等名 IPSA（国際学会）
4. 発表年 2021年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 高山裕二	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 316
3. 書名 憲法からよむ政治思想史	

1. 著者名 和田泰一, 高山裕二	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 228
3. 書名 政治思想と啓蒙	

1. 著者名 野口雅弘, 山本圭, 高山裕二	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 よくわかる政治思想	

1. 著者名 宇野重規, 伊達聖伸, 高山裕二	4. 発行年 2024年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 330
3. 書名 フランス知と戦後日本	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------